

環境教育におけるフィールドワーク (2) : 学生の学びとその意義

著者	ランブレヒト マティアス, 塩瀬 治, 鈴木 哲也, 尾崎 司
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	50
ページ	41-47
発行年	2010
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00009277/

環境教育におけるフィールドワーク (2) —学生の学びとその意義—

ランブレヒト・マティアス*, 塩瀬 治**, 鈴木 哲也***, 尾崎 司****
(平成21年9月30日受理)

Field Work in Environmental Education: Part II. On the Significance of the Participants' Learning Experiences.

Matthias LAMBRECHT SHIOSE, Osamu SUZUKI, Tetsuya OZAKI, TSUKASA
(Received on September 30, 2009)

キーワード: 自主性, リテラシー, 環境教育, ESD, 異文化理解
Key words: Independence, Literacy, Environmental Education, ESD, Intercultural Understanding

《目次》

- はじめに
1. 研究目的
 2. 研究方法
 3. プログラム概要
 4. 環境都市フライブルクでの学外授業
- 以上が、環境教育におけるフィールドワーク (1)
5. フライブルク ワークショップ マッピング終了後の感想の分析
- 5-1. ワークショップ前のイメージ
 - 5-2. フライブルクのゴミの様子
 - 5-3. 日本とドイツ (フライブルク) の比較
 - 5-4. フライブルクに学ぶべきところ, 自分達がこれからしていきたいこと
 - 5-5. 感想分析のまとめ
6. ドイツ人から見た学びの意義
- 6-1. 「環境都市」フライブルクを考える
 - 6-2. 「市民の環境意識」について
 - 6-3. マッピング活動の意義について
 7. まとめ

5. フライブルク ワークショップ マッピング終了後の感想の分析

ワークショップ終了後参加者それぞれが書いた自由記述による感想を観点別にみていく。なお、あまり記述の差が

ない場合には高校生の生徒の感想を中心に引用し、カッコ内の番号は表4の資料の感想一覧の番号に対応している。(高校生14名, 大学生6名を含む大人9名から回収できた。)

5-1. ワークショップ前のイメージ

高校生の感想の中では14名中10名の記述の中にワークショップ前のフライブルクのイメージが読み取れる (2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, 13, 14)。「環境都市」(2, 5, 6, 7, 8, 11, 13), 「環境にやさしい都市」(4), 「特に環境に取り組んでいる」(14) があげられていた。ここから環境に配慮している都市であるということは多くの高校生がもともとイメージしており、同時に「環境に対してすごく厳しい町」(3), 「ギスギスしているかと思った」(5) のようにヒトにも厳しいのではないかというイメージも一部の生徒にはあったようである。大人でも同様に「環境に対する配慮が万全に整っているエコな街」(106), 「環境のデイズニーランド的イメージ」(202) など「環境都市」のイメージが5名 (101, 103, 105, 106, 202) にみられた。

5-2. フライブルクのゴミの様子

高校生の感想の中では14名中9名がタバコのポイ捨てや地面のタバコの吸い殻, ゴミ箱の分別をやめたことなどゴミの様子を指摘していた (1, 3, 4, 5, 8, 9, 10, 11, 13)。「地面やゴミ箱をみて『えっ?』てなる」(13) や「ゴミをポイ捨てする人もいた」(10), 「携帯灰皿を持っていない」(9) など「環境都市」として抱いていたイメージとのギャップがかなりあったことが読み取れる。またゴミの分別を無くしたことに対して「ゴミのリサイクルに対しての知恵やゴミに対しての教育がなくなってしまう」(3) と心配している生徒も見られ、「別々に細かく分別することは大変

* 児童学科・保育科資料室
** 自由の森学園
*** 秀明学園
**** 保育科保育実習研究室

だけれどそこで自分の出すゴミについて知る事ができる」(4)のように分別自体に意味を見いだしている生徒もいた。一方で「観光客が捨てたりとかあると思う」(8)のように外部からの観光客について指摘をしている生徒もみられ、フライブルク市民以外の人たちのマナーの問題をどうするのかという課題を浮き彫りにした。

5-3. 日本とドイツ（フライブルク）の比較

高校生の14名中11名が何らかの形で日本とドイツ（フライブルク）を比較していた（1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 14）。

「市場は傷物も売って安くていい」(5), 「古い建物とか昔の町が残っている」(8)「Myバックは『エコバック』ってやつを買わなくてもふつうのバックで良い」(9)など、あるものを出来るだけ使う、使える物は出来るだけ使うという考えが当たり前に行われて、現在の日本のように新しいもの、形や色の良いものをどんどん消費するのと対称的である点に触れている生徒がみられた。

また日本人とドイツ人の意識の違いについて触れている生徒も多くみられた。ドイツの人は「何をするのかも自己責任というか、自分が言われるからではなく、『やろう』と思うからやる」(7)。そしてそのような意識の違いが教育の違いであり、「日本は言われてやる、何も考えないでやる、特に自分の考えを必要とされていないというような感じになっている気がするし、ドイツは自己責任、自分でやる、自分の考えを必要とされている」(7)と指摘した。この点に関しては、大学生の「特に驚いたのは大人だけではなく、小学生くらいの子どもも自分の意見をいえる」(105)という感想もみられた。この感想は、インタビューをしたときに父親が自分の子どもである小さい小学生に環境対策について意見を求め、意見を言うまで待ち、その小学生も自分の環境に対しての意見を明確に主張した体験に起因している。このことからドイツでは子どもの頃から学校教育だけでなく家庭教育でも自分の意見を持ち主張することが行われていると生徒たちは考えたと思われる。

5-4. フライブルクに学ぶべきところ、自分達がこれからしていきたいこと

高校生では「今やれることを全部やろうと思った」(2)という感想以外、これからの自分の行動に移していこうとするものはなかった。それに対し大学生の6名中4名(102, 103, 104, 106)に環境に対して「自分の意識から変えていきたい」(102), 「自分に何が出来るのかという事を考えてこれから行動していきたい」(104)というような感想がみられた。

5-5. 感想分析のまとめ

フライブルクが環境を最優先にしており、環境に対して

の住民意識が高いことは例えば資源リサイクル推進議会(編)(1997)の中で日本でも紹介されている。

事前にフライブルクが「環境都市」であることを生徒に伝えていたため、多くの生徒が「環境都市」というイメージを持っていたようである。しかしそこでの「環境都市」とはゴミは一切なく、きれいで緑豊かな、エコの街といった理想郷が生徒達には描かれていたのであろう。そのためタバコのポイ捨てや路上のタバコの吸い殻、荒れているゴミ箱の様子にかなりショックを感じたのであろう。現実にはゴミの分別をやめたのも含めて多くの原因が「環境都市」の理想郷を求めてやってきたフライブルク市民以外の観光客のせいであるとしたらなんと皮肉な話である(なおゴミの分別は後で業者がするとのことであった)。

日本では新しいもの、形や色の良いものが好まれる傾向にある。古くなった家はペンキを塗ってきれいにしたり建て直したりしたほうが良いし、果物や野菜は形や色がほぼ揃えられているものを優先して買う傾向にある。このような価値観が必ずしも世界共通ではないことを多くの生徒達はドイツのフライブルクの街の散策を通して感じたようである。

さらに、自分の意見を持ち、自己責任を小さい頃から当たり前のように教育し、オートノミー^(註1)の育成を家庭でも大事にしているドイツと、パターンリズム^(註2)のもと多くの判断の責任を親が持つ日本(最近パターンリズムは崩壊し、決定は子ども自身、責任は親という構図になっている日本)のギャップも肌で感じとった。環境を守るためにはオートノミーだけに頼っていたのではハーディンの「共有地の悲劇」(シュレーダー=フレチェット(編)(1993))を招く可能性がある。少なくとも、今のところ先進国以外の国々でオートノミーだけに頼っていたのでは自然環境の保全は望めないであろう。理想は環境倫理観の共通理解ができればいいのであろうが、現実的にはある程度の国家やそれぞれの自治体による「上からの」政策が本質的には必要である。そうだとはいしても、自らやるのが当たり前であるほうが嫌々やるより気持ちいいのは確かである。

大学生に比べ高校生の方が、フライブルクでの経験を客体化し自分のものとして行動化していこうという記述があまりみられなかったのは、高校生の多くはドイツそしてフライブルクの現状を受け入れるだけで精一杯だったのかもしれない。生徒達が帰国後冷静になってから日本の良さももう一度考えた上で、自分(自分達)がどうありたいのかについて考える機会をもってもらいたいと考える。

今回のフライブルクの散策を通して、生徒は、異文化を体験し、自分のくらしや考え、行動が絶対的ではないことを知った。これらを通して相対的視野をもち、環境に対する知識を学び続けるとともに環境政策にも常に批判的な思考を持ち続けた上で自主的に環境対策に取り組んでいって

環境教育におけるフィールドワーク (2)

表 感想の一覧

番号	属性	感想
1	高校生	気づいた事・教会が大きかった。のぼってみて怖かった。買い物かごが安かった。日本にない野菜、果物があつた。障害者は大丈夫なのか。自転車置き場が気になった。車が泊まりにくい。ゴミが日本より落ちていなかった。タバコの吸い殻とビンのふたがあつた。感想・福祉が二本と同じで高齢化が進んでいるけど不安がそんなにないという人が多かつた。車椅子もちゃんとしている所とない所があつて良くできていると思いました。
2	高校生	気づいた事・ドイツを見て他の国がかわる。自然はとても大切。工場による悪影響。感想。正直、フライブルグはよく見てみると環境都市としてはまだまだだと思つた。個々にいる人は自分の町が好きなんだと思つた。そういう町だから大切にできているフライブルグの人がうらやましい。やっぱり変わろうと思つたのならば言うだけではなく、行動にうつさなければ意味がない。一番大事なのはそこだと思つた。今やれる事を全部やろうと思つた。
3	高校生	感想：フライブルグの最初のイメージは環境に対してすごく厳しい町なのかなあと思つていました。実際は環境に対して良く考えている人もたくさんいましたが無関心な人もいることが解りました。もしゴミ箱の中味が自動的に分類されているとしたらゴミのリサイクルに対しての知恵やゴミに対しての教育がなくなつてしまつたと思つた。もっと無関心な人が出てきてしまつたと思つた。
4	高校生	感想：どんなに環境にやさしい都市といわれてもやはり矛盾はあるのだなと思つた。一番感じたのは、タバコのことだつた。この問題は日本の方が進んでいると思つた。道ばたにタバコが落ちてるのは気持ちのいいものではないし、臭いをもっとひどいと思つた。もっとドイツでもタバコについて考えるべきではないかと思つた。ゴミはどっちの方がいいのだろう？ 別々に細かく分別することは大変だけれどそこで自分の出すゴミについて知る事ができる。全部集めてしまつたのは簡単だけれど、出したら棄てれば良いという意識ができてしまつて良くないと思つた。フライブルグとしてはどうしたいのかわりたい。
5	高校生	感想：石につまずく。市場は傷物も売つて安くいい。環境都市つていうから、ギスギスしているかと思つたらそうでもない。ビニール袋もあるし、ポイ捨てもある。少し汚いくらいの方が私は落ち着く。
6	高校生	ドイツの自主性や環境都市フライブルグの長所と短所が見えてきました。福祉についてのインタビューを年齢ごとにやつてみるとよかつた。環境についての議論は高い意識のもと続けていて、環境意識があるので、これから改善されてさらによくなつていくと思つた。
7	高校生	誰に対しても強制できない。ドイツのような姿勢で毎日できるようなやさしいことから行動していく事が大切。感想：今回とても思つた事は私達は色々な年代・性別の人にアンケートしたんだけど、共通している事は皆しっかりと自分の意見をもっている。よく考えている、ということ。「わからない」という解答は一度もなかつたこと。「どうしたらフライブルグのような環境都市になるのか？」という質問に、「誰に対しても強制する事はできない」という様な事を皆、言つていた。つまり何をやるのかも自己責任というか、自分が言われるからではなく、「やろう」と思つたからやる…というような考え方で自立しているなと思つた。それには日本とドイツの教育の違いも大きく関わつていて、日本は言われてやる、何も考えないでやる、特に自分の考えを必要とされていないというような感じになっている気がするし、ドイツは自己責任、自分でやる、自分の考えを必要とされるという逆な感じがした。それが日本とドイツの意識の高さの違いに大きく関わつていると思つた。だから、何が違つてすごいい根本的な所から違つたのではないかと思つた。
8	高校生	感想：環境都市つていつている割にはたばこが落ちていたり、ゴミ箱が溢れていたりしてたいしたことはないって感じの意見があつたけれど、観光客がすてたりとかあると思つた。そんなこといつても日本よりぜんぜんきれいだと思う。フライブルグにも至らない所はあめけれど、まずは自分の町を美しくするということからかと思つた。自分の中では東京は汚いイメージしかなくてとてもドイツは古い建物とか昔の町が残っているから、それを汚さないように思つた人もいると思つた。だから日本のもう新しくなつてしまつた美しい街に住んでいる人は動きづらいのかなあと思つた。あと犬がでかくてちゃんとしつけれられていてすばらしいと思つた
9	高校生	感想：やはり完全に完璧な物事はないんだなと思つた。タバコのポイ捨てがあるつてことは皆、携帯灰皿を持っていないつてことだね。それは結構ショックだつた。タバコについては日本と変わらないなあ。My バッグは「エコバッグ」つてやつ買わなくてもふつ々のバッグで良いのよね。日本も自転車で走りたくなるような気持ちいい国にしたいね。いいなー自転車。
10	高校生	感想：やはりゴミはほかの地域とくらべると少ないがゴミをポイ捨てする人もいた。自分の家で野菜をつくつたりするなど有機栽培にこだわっている人が多かつた。
11	高校生	フライブルグ、自由の城。フライブルグに来てドイツが好きになつた。ここの空気・人・場所がなんだか親しみやすい。建物もあつたかい感じだし。でも環境都市として中途半端な感じかな。ポイ捨て、ゴミ問題、歩きタバコ。日本とあまりかわらないね。でもきれいだからこそ目立つ。だからすごくきれいな街であつてほしい。
12	高校生	思つたほど環境問題に対するとりくみが甘いように思つた。でも都市部しかみていないので一概には言えないと思つた。
13	高校生	高校生電線がない、飲み物の自販機がない。感想：環境都市フライブルグというイメージが少し薄れた。地面やゴミ箱をみて「えっ？」てなる。もし本当に機械的に分別されていたとしても他のグループの感想のように、それだと一人一人の環境に対する意識がなくなつてしまつたと思つた。分別用のゴミ箱も減つたらしいのでこれから先のフライブルグはどうなるのだろうか。また、何年後かにきたら、さらに変化していると思つた。良い方か悪い方かわからないけれど。でも環境を気にしている人もたくさんいて、街だけを見て判断してはダメだなつとも思つた。ソーラーパネルをつけていたり緑を増やしたり増やすつていうか飾つている感じでそれがまた、良い気がする。結果、またドイツに来たい。
14	高校生	フライブルグは特に環境に取り組んでいるときいてもいたけれど、実際現地の人でもそう言つていて、意識があるのだなつて思つた。色々な人にインタビューして、一人一人が環境に対して考えざるを得ない、自然と入つてくる生活のシステムになっているのだつていうのを強く感じた。インタビューしたほぼ全員がこの意識は強制ではなく、自らの意識によるものであり、そのようにしていかないと環境問題は変わらないと言つていて、本当にすごい事だつと思つた。そして日本での環境意識がなぜ低いのかを考えたとき、今環境破壊でこんな事があるつていう知識がまず、足りないし知ろうとしない、知らないと言つた事を自ら知らないつていう悪循環なのだろうと思つた。今回のプレゼンで知らないつていうことを知れて、知る事は大切なのだなつて思つた。そしてすごく楽しくできて良かつたつと思つた。やっぱり地元の人の生の声というのは大きいつと思つた。

101	大人 (大学生)	環境都市 Freiburg の町並みを探索して、風景が本当にきれいな町だと思いました。目立って大きい建物もなく、建物のすきまからみえる空がある風景はこれからもずっと守って欲しいと思いました。今回の度で良い面と悪い面を自分の目で実感できたこと、それが今回の一番の収穫だったと思います。他のグループの発表のインタビューなども聞いて、自分たちだけでは見えてこなかった面も聞いて良かったです。高校生達の意見も聞く事は自分の世界もひろがるので、今回のグループで行動できた事はとても良かったと思います。とても楽しかったです!!
102	大人 (大学生)	感想：思っていた以上にゴミが多かったし、棄てられているゴミの量に対するゴミ箱の数が少ないのでは???ということがわかった。でもどこを歩いても緑を身近に感じられてすてきな町だと思う。ただ、それはフライブルグで暮らしている人々が必ず環境について何か意識していて、緑と暮らす事のできる良さを理解しているからだろう。だから二本でも、まず変えなければならないのは一人一人の意識である。自分の意識から変えていきたい。
103	大人 (大学生)	感想：環境都市といわれているフライブルグだけどころタバコなどのゴミが棄ててあったりして実際にはいくら先進都市でも個人の環境に対する意識はそれぞれで個人にまかされていてあまり高くない人も多くいるのになって思った。インタビューをしていて日本人よりはそれぞれの環境に対して考えていて、できる事をやろうとしているのが解りまして。日本でできる事を考えていこうと思いました。
104	大人 (大学生)	グループ活動をはじめた最初の頃は先生方に頼ってしまい、自分が何をしたら良いのか解らなかつた。大学生なので自分がまとめたり、メンバーの意見を聞かなくてはいけなそう思っていたが、慣れない事とはじめてのメンバーでかなり緊張と苦痛だった。でも時間がたち、まとめの段階になっていくうちに、だんだんと意見も出るようになってきて、少しだけチームワークも見られて良かったと思う。私自身はリーダーシップをとる事が苦手だが、このグループワークを通して、少しだけ成長できたかなって思う。「環境」という面の学習はもちろん、いろいろな意味で勉強になった。市民の生活を間近で見ることができて、実際の生活を知る事ができた。私達は一人一人が意識をして、環境について考えていく事が必要だと思う。自分に何ができるかという事を考えてこれから行動していきたい。
105	大人 (大学生)	感想：フライブルグは環境都市といわれている通り、市民一人一人（フライブルグ以外に住んでいる方も）が環境について高い意識を持っていた。それはやはり、黒い森が近くに有る事、また環境問題は誰にでもあてはまる問題だからこそ考えざるを得ないという思いが強いからなのだと感じた。特に驚いたのは大人だけではなく、小学生ぐらいの子どもも自分の意見をいえると言う事で、それは幼い頃から批判するという教育を行っている事と繋がっているのではないかと思った。ただし、いくら環境都市とはいえども全てが良いという訳ではなく、まだまだ改善すべき所はたくさんあり、終わりはないのだというインタビューの答えがとても印象的だった。
106	大人 (大学生)	環境都市フライブルグということで、環境に対する配慮が完全に整っているエコな街というイメージで街を歩きましたが、実際の街はゴミの分別がされていなかったり、タバコのポイ捨て、環境問題への意識が低い人がいたり、環境都市らしからぬ姿もありました。今回の活動で感じた事は、実際に自分の目で見てみる事の大切さです。イメージにとらわれず、自分の目で認める事で、物事の本質がわかるようになるのだと思いました。それから高校生と班を組んで感じた事は、小さな事でも環境意識を持ち続ける事の大切さで「これはどうしてこうなってしまったのだろうか?」「これは本当にこのままでいいのか?」そういう考えを持ち、その問いに向けて行動できる人がいるからこそ、状況が変えられるのだと思います。私もその1人になれるように、日本に帰っても努力を続けたいと思いました。
201	大人	感想：自転車走ってかわいらしい、のどかな街かと思っていたが、自転車が意外と猛スピードで走っていたり、ポイ捨てがあつたりして、イメージと現実はずいぶん一致するものではないということが、わかりました。
202	大人	感想：最初は中世のオーラがあつてドイツ性を越えた、スイス、フランスのヨーロッパな場所、環境のディズニーランド的イメージがあつた。分別について・機械による自動分別は、分別の正しさや資源を大事に扱う事を学習できなくなるので逆効果ではないか?森を大切にしようとするフライブルグの人々が考えて環境先進都市にしてきたのは理想的な理由としてはいいのですが、それ以外に経済的な理由とか何かの要素があつたんじゃないか。町の市場(有機野菜の売店)は他の町にくらべて、なぜこんなに盛んだつたのか。逆に言えばスーパーだけしか利用しない人が少ないみたいだつた。
203	大人	環境に良い生活をする それは大気汚染を防ぐこと自転車に乗ること、ゴミを分別すること…自転車に乗って生活することが環境に良い事だとわかつて実行している。感想・点字ブロックがない。音による案内もない……という環境で障害を持つ人たちはどんな生活・社会ルールに生きているんだろう??と日本に有ってドイツに見当たらないものを探ることで視点を得た気がする。その一方でドイツにあつて日本にない、「環境に良い生活がしやすい」環境があることを確認しました。

もらいたい。

(以上 鈴木 哲也)

6. ドイツ人から見た学びの意義

6-1. 「環境都市」フライブルグを考える

今回のワークショップではやはり「環境都市」のイメージと現実とのギャップが多く参加者に大きな衝撃を与えたようである。そこで、まずその「環境都市」という概念について詳しく述べる必要があるであろう。「環境都市」の正式な名称は「自然及び環境保護のドイツ連邦首都」であるが、1992年に初めてドイツ環境支援協会(独: Deutsche Umwelthilfe e.V.)よりフライブルグに与えられ

たのである。フライブルグの他にはハイデルベルク(独: Heidelberg)やハム(独: Hamm)、それからノルトラインウエストファーレン州にあるネッターズハイム(独: Nettersheim)にも与えられた名称であるが、世界的にはそれほど知られていないのも現状である。フライブルグが「環境都市」のイメージ形成に貢献した要因は大きく二つに分かれる。

まず、南ドイツでフランスの国境の近くにあるフライブルグであるが、その位置こそがフライブルグを囲む大自然を守るものとなった。つまり、20世紀の前半まで敵国同士だったフランスとドイツの間にあり、常時に戦闘に巻き込まれる危機にあつたために、フライブルグの周りには環境破壊を伴うような工場も作られない状況だった。そのお

かげで、フライブルクを囲む黒森（シュワーツワルト）も大きな破壊を受けずに維持されてきたのである。

次に、根本的に「環境都市」への道を開拓したのは1975年に地域における環境保護運動である。当時はフライブルクの近くにあるヴィール（Wyhl・ドイツ）、カイザーアウグスト（Kaiseraugst・スイス）、ゲルストハイム（Gerstheim・フランス）とそれぞれに原子力発電所が作られる計画があったが、環境破壊と訴えた市民団体の強い反対運動によって中止となった。その活動をきっかけにドイツ連邦環境自然保連盟BUNDと地方の市民団体は1976年に最初の世界代替エネルギー展示会を行い、単に原子力を否定するのではなく、未来や持続性を考えたエネルギー資源を積極的に考える取り組みを始めた。1980年代に注目される酸性雨問題と1986年に起きるチェルノブイリ原子力発電所事故などの事件をきっかけに、ドイツやヨーロッパでの環境意識がさらに高まる。そういう環境問題に対する積極的な市民活動がその後のフライブルクの政府と行政にも大きな影響を与え、「環境都市」の基盤となった。

フライブルクの現状を見てみると、特に太陽発電で住民の需要をほぼ満たしているヴォバーン地区が注目を集めている。さらに、公共交通機関がとても充実しており、市内では自動車がほとんど見られなくなった。それに並ぶ様々な努力を基に、2030までにCO₂の排出量を40パーセントも削減する目標を立てている。しかし、グリーンピースやBUNDからは決して持続的な町づくりになっていない、電力会社からの干渉が多すぎるなどという「環境都市」のイメージに対する批判があげられていることも現状である。また、公共交通機関の安い定期券や公共の空き地の再自然化及び再緑化などという環境対策はフライブルク以外の都市にも多く見られる。そのために、ドイツ国内ではフライブルクが「環境都市」としてあまり高く認識されておらず、むしろ海外からの報道メディアから注目されることが多いようである。

6-2. 「市民の環境意識」について

ワークショップ参加者の多くは、とにかく町中で見たゴミのポイ捨てやタバコの吸い殻についてかなりの違和感を覚えたようだ。おそらく「環境都市」というイメージとともに、その市民もある程度理想化したのではないかと考えられる。いうまでもなく個人主義や多様性を重視するヨーロッパでは、街の人々の環境意識もバラツキが大きい。さらに、フランスとスイスにも近いフライブルクでは「ドイツ人」として生まれて育った者だけではなく、スイスやフランスの文化の中で育ってきた人々も大勢に通っている。環境意識の高い人間の努力でドイツの自然運動が生まれてきたであろうが、当然に環境に極めて無関心な人々もいるのである。ここでは半日だけのワークショップの限界も感

じる。例えばポイ捨てというような、結果が目の前に起きるようなプロセスはすぐに見られるが、校庭の再緑化のような、長時間をかけないと成果が上がらない環境保護活動はむしろすぐに見えない場所で起きていることが多い。そのため、全体像を把握するのに環境保護活動プロジェクトを個別に見る重要性も見えてくるのではないだろうか。

また、ドイツにおきるゴミのポイ捨て問題は過去に比べるとむしろ改善されたのだ。2003年に飲料缶のデポジット制度が導入されるまでは、道ばたや公共の広場で空き缶が捨てられることがよく見られる光景だった。2003年以降は、空き缶や空き瓶をお店に返すことでデポジットが消費者に戻る形になり、結果的に町中の空き缶や空き瓶が消えることになった。つまり、環境に経済的な措置を加えることで、環境問題に対して無関心な人々にも環境の意識した行動だけでもとらせる効果が得られるのではないかと考えられる。しかし、そのような仕組みこそ「見えない」ところで起きているので、タバコの吸い殻やゴミのポイ捨ての方が強く印象に残るであろう。

次に、参加者から公共のゴミ箱では、ゴミの分別が行われていないという指摘もあった。確かに、日本から来た高校生にとっては「環境都市」というイメージもあり、少なくとも日本に似たような形で例えば「燃えるゴミ」「燃えないゴミ」「古紙」などという分類を期待していたのではないだろうか。ところが、ドイツの一般家庭では実際に「生ゴミ」「容器・包装材料」「古紙」「ビン（白・緑・茶色）」「コンポスト」などという分別が行われている。駅のホームや駅ビルにあるゴミ箱もだいたいゴミの種類によって違うゴミ箱に入れられることにもなるが、公共の場所にあるゴミ箱には「全般ゴミ用」のものも少なくはない。フライブルクもそのような取り組みをしているが、その理由は明らかにされていない。あくまでも推測になるが、例えば観光客が多くいるということが大きな原因になっているのではないかと考えられる。ここで述べた日本とドイツの分類の比較から読み取れるように、国あるいは自治体によって分別の方法や分類も違ってくることが多く、さらに言葉が違っていくとその分別の仕方がわからないケースも想像できるのではないだろうか。それによってゴミ処理の業者側で別々に回収して会社で再び分別を行うよりは、まとめて回収してから処理場で初めて分別した方が経済的なのではないだろうかと考えられる。

参加者から、ゴミに対する意識の低下につながるのではないかと心配も述べられたのだが、少なくともフライブルク住民については徐々にゴミの量が減らされ、そしてリサイクルが可能なゴミの割合も高くなっているというデータが環境知事^(註3)によって発表されている。つまり、空き缶や空き瓶のポイ捨て問題と同じように、「見える・見えない」場所によって、市民の環境への取り組みが違っ

ているということが言えるのではないだろうか。

6-3. マッピング活動の意義について

この章では「環境都市」の理想と現実、それからフライブルク市民の「見える・見えない」環境意識のそれぞれのギャップを中心に考えてきたが、参加者にもあえてそのギャップを体験してもらえることを望んでいるのである。「環境都市」や「ドイツ人の環境意識」などというような分類もある程度避けられないだろうが、場合によっては目の前にあるものが提起されたキーワードや分類に制限されてしまうこともあり得る。フライブルクのワークショップで実際に見た「環境都市」の表裏を知ることによって、事前に浮かべたイメージと本物との差を実感することができたと思われるが、その経験をきっかけに別の場面でも事前に作られたイメージを問う力や敏感さも育まれると良いと考えられる。

(以上 ランプレヒト マティアス)

7. まとめ

高校生と大学生が合同で環境先進国といわれているドイツをフィールドワークにして研修旅行する実践はきわめて希有である。ましてはドイツ市民の環境意識を直接口答でアンケート調査するワークショップは前例がない。

調査地は日本でも知られる有名な環境都市のフライブルクで、実際に自分の目で確かめ、インタビューを行い、現地を歩いた実体験にもとづいた生きた情報を参加者は得ていた。実際に町を歩くと一般に報じられているような美しい環境都市というイメージと違うゴミの散乱、不完全な分別の様子に参加者は衝撃をうけていた。このワークショップでフライブルクの環境都市というイメージとは違う実態を参加者各人が実感していた。例えばインタビューの結果、子どもにしっかりと自分の意見を持ち自己責任力を持たせるとドイツの教育の一面が認識された。また、調査した多くのドイツ人が環境について考えたり、具体的に行動したりしていることも感じたり、古い家屋を大切にする事や形のふぞろいの野菜でもよいという日本とは違う価値観を発見したりしていた。参加者が各グループに別れて行った町で気がついた事やインタビューの結果を全体会で報告する事で、ドイツと日本の環境に対する意識と活動の違いが鮮明になっていた。そのふりかえりを通して参加者が日本での日常生活を見直したり、環境に対する日本とドイツの考え方の違いを知ることができた。

また、参加者が驚かされた空き缶や空き瓶のポイ捨ての様子は、具体的な体験による実感で、マスコミに報じられるものが全て正しいものではないという視点を持つ事ができた。参加者には外見上目立つ町の姿を観察するよう

に話したため、ゴミのポイ捨てなどの印象が強かった。しかし、全体会でのふりかえりの中で、実は観光客がゴミの散乱の原因になっている可能性や、表には見えないフライブルク市の進んだ環境政策について見直してみようという契機になった。フライブルクでのワークショップによって自分の生きた実体験とそのふりかえりから、「環境都市」の表と裏を知る事ができた。これは日常生活でも事前に与えられた事物のイメージを疑い、その実像はどうであるかを問う資質を育むものであった。このドイツ研修旅行を通じて、参加者それぞれが環境にたいしての価値観を確かなものにし、自分の新しいライフスタイルを想像することと、行動をおこそうという意思がうまれていた。特に大学生は今回の経験を客体化して自分の今後の行動を見直していこうというモチベーションを強くしていた。

(以上 塩瀬 治)

註

- (1) オートノミーとは自律性と訳され、自己決定が尊重される考え方である。加藤(1991)によれば「身体であれ、生命であれ、自己の所有については、他者への危害を含まない限りで、たとえその決定が理性的に見て愚かしいものであろうと、対応能力(判断能力+責任能力)のある個人の自己決定に委ねられなければならない」とする一方、「環境倫理学の構想する世代間倫理には、自己決定の原理の否定が含まれている」としている。
- (2) パターナリズムとは加茂直樹、加藤尚武(編)(1998)の中の江崎によれば、「ある者(個人、団体、あるいは国家など)が、他者自身のためになるという理由から、その他者に対してなす干渉行為、あるいは、そのような行為の思想的な立場ないし考えを、一般に『パターナリズム』と言う。」としている。
- (3) ドイツ一部の自治体で環境課長の権限を拡大した役職である。(独: Umweltbürgermeister)

引用・参考文献

- 1) FWTM Freiburg Wirtschaft Touristik und Messe (2008). Freiburg Green City. FWTM GmbH. Web. http://www.freiburg.de/servlet/PB/show/1199617_11/GreenCity_D.pdf (27 Sep 2009)
- 2) 加茂直樹、加藤尚武(編)(1998)『生命倫理学を学ぶ人のために』, 世界思想社, p.65.
- 3) 加藤尚武(1991)『環境倫理学のすすめ』, 丸善ライブラリー, p.7.

- 4) Mayer, Axel (2007) . „Freiburg und Umwelt: Alles Öko in der Umweltstadt?“, Freiburg-Schwarzwald.de. Web. <http://www.freiburg-schwarzwald.de/oeko-hauptstadt.htm> (27 Sep 2009)
- 5) Rigos, Alexandra (2002) . „Die Umwelt-Hauptstadt erlebt ihren zweiten Frühling.“, greenpeace magazin, 5/2002. Greenpeace Media GmbH. Web. <http://www.greenpeace-magazin.de/index.php?id=3539> (27 Sep 2009)
- 6) 資源リサイクル推進議会 (編) (1997) 『徹底紹介「環境首都」フライブルク』, 中央法規, pp.12-22, pp.85-98.
- 7) シュレーダー=フレチェット (編) (1993), 京都生命倫理研究会 (訳) 『環境の倫理 下』, 晃洋書房, pp.445-470.
- 8) Stadt Freiburg, Presse- und Öffentlichkeitsreferat (2009) . „Gute Abfallbilanz 2008: Freiburger recycelten 68 Prozent ihrer Abfälle“ [freiburg.de](http://www.freiburg.de), 26.08.2009. Web. http://www.freiburg.de/servlet/PB/menu/1214502_11/index.html (27 Sep 2009)

Summary

Freiburg im Breisgau, located in southwest Germany, is often considered to be one of the leading cities regarding environmental practices. This has earned it the title of “eco-city” a number of times.

As part of a two-week international study program in Germany, Japanese high school and undergraduate students were asked to conduct an impromptu field study to verify their preconceptions of environmental awareness in Germany through direct observations and follow-up interviews with local citizens. The participants were then encouraged to actively reflect on the contrasts between their original assumptions and their actual experiences in town.

This allowed the participants to gain further insight into media constructions and increase their understanding about cultural differences, as well as leading them to new conclusions regarding their own consciousness concerning environmental issues in their everyday lives.

This is part II of a paper divided into two sections. The focus of this section is on the analysis of the data collected during the field study and concludes with a commentary on the results and the study program itself. (Part Two)